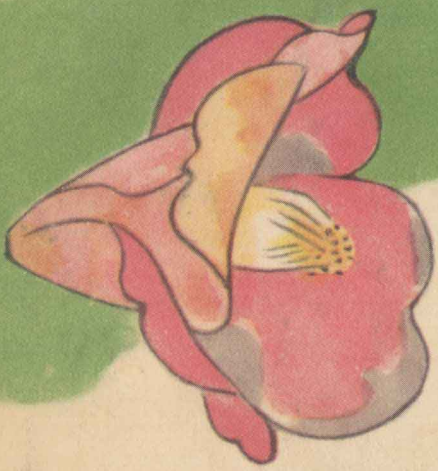
東京の人

川端康成著



東京の人

川端康成著

東京の人

昭和三十年一月三十一日　發行
昭和三十年八月　五　日　六刷

定價　貳百七拾圓
地方賣價　貳百八拾圓

著者　川端康成

發行者　東京都新宿區矢來町七一番地　佐藤亮一

發行所　東京都新宿區矢來町七一番地　株式會社　新潮社
電話東京三四局代表七一一一(八)
振替　東京　八〇八番

亂丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へ致します。

印刷　扶桑印刷株式會社　製本　新宿　加藤製本所
Printed in Japan

目

次

しようぶ湯……七
宝石と母……三〇
ばらの庭……五五
大事の前……八〇
一時の平和……一〇五
中年の女……一二七
また二人で……一四五

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

かり寝の夢……一六六
波の花……一九〇
人間一度は……二一七
熱帯魚……二三九
生理的から……二六八
女ばかりの家……二九六
水の上……三二一

裝幀　金島桂華

東京の人

しようぶ湯

爪型のひすいの指輪を、左の薬指にさしてみて、ながめている敬子の背に、朝子が言つた。
「母さん、お金、ちようだい」
「どこへ行くの？」
敬子は指輪の石をながめたままである。
「ゴルキイの（どん底）を見に行くの。新劇よ」
「（どん底）が新劇だぐらいは、知つてますよ」
「義宮（よしのみや）さまだつて、二度見てもいいと、おつしやつたんですつて……」
「そう？」
「一時からなの。おくれるわ」
「いくらいるの？」
「千円は、だめ？」
「だめね、その半分もやつとだわ」
敬子ははじめて娘の方を振り向いた。四十三という年にしては、なんと若い顔だろう。
二十の朝子は、紺のコオト・ドレスの胴を、サツシュのベルトで、くびれるように細くしめてい

る。少しきつい目鼻立ちに、なにか不満げな、かげがある。
敬子は五百円札を、手さげからさがし出すと、だまつて朝子に手渡した。
朝子は表情もなく、あいさつもなく、ふきげんな足音を残して出て行つた。
敬子はこのごろ、朝子のふきげんを見ると、自分が責められているような、いたみを感じる。朝子の兄の清にたいしても、そうだつた。敬子に素直な愛情を見せてくれるのは、末の弓子ばかりだ。
「さあ、十二時」と、敬子は手をのばして、ラジオのスイッチを入れた。小さい金時計の針を見た。短針と長針が、今重なり合おうとしている。正午の時報が鳴つた。
敬子は昨夜から、この時計の時間をしらべていたのだ。最高級のパテツクだから、正確にきまつているが、やはり敬子はすつとした。
ひすいが、七十万円、パテツクが二十五万円、二つとも売りものである。敬子は宝石や時計のブロオカアをしていた。
ラジオはニユウスのあと、木琴の独奏で、ビゼエのカルメンを演奏しはじめた。しかし敬子は、二階からおりて来る、重い足音を聞きつけた。
指輪や時計をそれぞれ美しい小箱に、手早くおさめて、手さげに入れてしまうと、敬子はその足音に身がまえた。
昨夜、気まずいことがあつて、その足音の人を、どう迎えてよいかに、とまどうのだつた。
重い足音は、廊下でとまつた。
ネルの寝巻にお召の丹前を重ね、帯をぐるぐる巻きにした後姿が、なにか考えふけるように、明るい若葉の庭を、ぼんやりながめている。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

その俊三の後姿が、いかにもうらぶれていて、敬子まで悲しくなりそうで、
「お茶をあがりません？」と、つとめて自然に声をかけないではいられなかつた。
敬子の夫は戦死をして、今は島木俊三と暮している。清と朝子は夫の遺児だが、弓子は俊三の連れ子で、敬子の血をわけた娘ではない。
俊三は紫檀の机の前に来て、ものうく坐つた。眠り薬のせいか、顔がはれぼつたく青い。
「二階の部屋のね、君の荷物をこの部屋におろしては、いけないかね？」
「ええ？」
とつぜんの奇異な言葉が、敬子にはのみこめなかつた。

一日のメエデイ、二日の日曜、三日の憲法発布、そして今日は端午の節句（子どもの日）、このところ休日つづきであつた。
昨日、会社からおそくもどつた俊三は、ひどく酔つていて、敬子を抱きながら、
「京子……」と、別れている妻の名を呼んだりした。
白けきつたそのあとで、よくも俊三は、この家を抵当にして、金をつくつてくれと、敬子に頼めたものだ。この家は四五年前、敬子が自分の金で建てたのだ。
「酔つてるのね、この家だけが、私たちの頼みじやないの？　いざという時には、この家を上手に貸すか、旅館でもして暮すつて、いつも言つてるでしよう。もうその時が、とつくに来ているのだわ」と敬子は言つた。
俊三の出版会社が危くなつて、金ぐりがつかない。この家なら、二百万円は借りられるだろう。

それだけでもつぎこんで、一時しのぎにと思うのだろうが、敬子はこの家を失いたくなかつた。
それでなくてさえ、清と朝子とは、母の俊三とのあり方に、つめたい目を向けている。またここで、敬子が俊三に弱くなることは、一家の破滅だろう。
「女の働きで建てた家を、男のあなたが……？　さびしいわね」
「ああ、さびしいよ、落ち目になると、さもしいよ」
酔つている人とは思いながら、敬子も声高になつていた。
その時、二人の部屋のふすまがあいて、
「お父さま、ママを困らせないで……」と、弓子がしよんぼりつぶやかなければ、争いはおさまらなかつたにちがいない。
「弓子ちゃん、ありがと……。おやすみなさい」と、敬子の声はやわらいだ。
しかし、敬子は階下の部屋へ行つて寝た。俊三と同棲して以来、はじめてのことだ。
ここ半年ほど、俊三は事業が不振で、不眠症になやまされ、気むずかしかつた。言動も常軌をはずれることがある。生活費は渡してくれない。
敬子は株券を手ばなしたり、宝石や時計が多く売れて、歩合いのはいつた時は、俊三の病妻の療養費まで送るのだつた。
敬子は自活の力があるし、以前に相当な商売をしたおぼえもあるので、男が不運に向いたからといつて、同情こそすれ、それを責めたり、うろたえたりはしなかつた。
昨夜の争いを、俊三が根に持つて、憎いじやまものを追いのけるように、敬子のたんすや道具を、階下におろせなどと、今朝になつて言い出すのは、敬子にはわからない。この人はどういう考えな

のだろう。
敬子は左手にあごをのせて、大きい目で、俊三の白つぽい唇を見ながら、
「移すのは、かまいませんわ。だけど道具を動かすと、ほこりが出て、大掃除と同じですわ。あなたの方が、下のどの部屋にでも、おやすみになればよろしいでしよ」と、ついまた切口上になつた。
「気分を変えてみようと思つたのだが、そんなに大ごとなら、よすよ」
と、俊三は負け犬のような顔をする。ふところ手のままだ。
六七年前の男らしさは、どこにもない。敬子はふつと立つて台所へ行くと、女中に俊三の食事を言いつけて、
「今日はお風呂に、しようぶを入れてくれたわね？」

この二三年、敬子は外出の前に、かならず入浴する習わしだつた。
高価な宝石や時計を持つて、それ相当の人をたずねる時は、すこしでも美しくありたい、若く思われたい、女ごころからだが、また商売のこつでもあつた。高い指輪を売りつけるには、自分がそれにふさわしく見えるのがいい。自分が気おくれしていたり、売る相手に気押されては、だめだ。高級車で乗りつけるのだつて、敬子の手だつた。
家じゆうで、浴室を一番立派につくつたのも、
「ゆくゆく、旅館にする時を、考えてね」と、敬子は言うが、心ゆたかに、そこで自分の美容術をするためだつた。

腰高な窓のガラスからは、隣り屋敷の雑木林だけが見える。
「ちよつと、温泉場の気分でしよう」
早くわくガス風呂で、かまはきれいに隠されているのに、湯船のなかから、小さいハンドルに手をやつて、ガスの火をつけたり消したり出来る、新式のこしらえだつた。
敬子が檜戸をあけると、湯のなかで、弓子がしようぶの葉を鳴らしていた。
「あら、ママ、まだだつたの？」
「弓子ちやん、はいつていたの？」
「お兄さまも、お姉さまも、おすみになつたから、ママはもうとつくにと思つてたわ」
弓子は敬子といつしよにはいれて、うれしいという顔をした。
敬子もかけ湯をしながら、軽い気分をとりもどせた。
弓子が敬子たちと暮すようになつたのは、もう小学校の五年生の時だつたから、おたがいに他人であることは勿論、産みの母から父を奪つた人ということも、はつきり知つていた。しかし弓子は今、まことの母のように、敬子になついている。幼な過ぎるほどの素直さである。
今年も「母の日」が近いが、去年の母の日に、
「お母さまこれ……」と、ピンクのカアネエションをくれたのは、弓子だけだつた。実の子の清や朝子ではなかつた。弓子はいつも「ママ」と言うのに、この日に限つて「お母さま」と呼んだ。敬子は涙が先きに出て、言葉が出なかつたものだ。
弓子の産まれたころ、母はもう胸が悪かつた。お産で病いが進んだかも知れない。弓子は祖母に育てられるうちに、母は入院した。やがて、父が応召し、祖母がなくなると、弓子はあちらこちら

に転々させられて、少女期を迎えた。
父が敬子と暮すことになつて、まあ家庭の形のなかに落ちついた。むしろ弓子は初めて安心し、幸福さえ感じたのかもしれない。敬子も弓子に情が移つた。弓子は敬子に頼りきつていた。
敬子の実子二人は、あまりの美少女である弓子に、最初から、まぶしいような驚きと敬いの目を向けていたようだ。母と弓子との愛情は、ねたむよりも、不思議らしい。
弓子は湯のなかから、
「ママ、しようぶに虫がいたわ」
「どんな？」
「ねえ」
「どれ、どれ……？　なに言つてるの、弓子ちやん、これ、しようぶの花ですよ」

うす黄色い穂のような小花を、敬子は拾いあげて、弓子の耳の下をつついた。弓子の耳たぶは、ふつくりと愛らしい。
「いや、いや、ママ」
「これ、花ですよ」
「しようぶの花つて、紫や白じやないの？　絵やきものにある、大きな花……」
「あなたの知つているのは、花しようぶ、花あやめ……、葉や茎がこんな匂いしないでしよう。これから、香水の原料も取るのよ」
「あたし、この匂い好きじやないわ。子供の時、しようぶ湯なんて知らなかつたせいかしら？」と、

弓子はなにか思い出す目で、
「ママは、毎年、ゆず湯や、しょうぶ湯をなさるわね」
「私の小さい時分、下町ではね、どこの家もお節句は、屋根にしょうぶとよもぎをあげて、女の人は、この葉で髪を結んでいたわ。おまじないよ」
「なんのおまじない……？」
「魔よけよ。悪い魔にみいられないように、弓子ちゃんも髪に、結んであげましょうか」
弓子の髪はくせがないし、その黒があまり美しすぎて、パアマネントなどで、縮らすのが惜しかつた。前髪をきりさげ、もとどりを高く一つにゆわえ、いつもは、好みのリボンで結んでいる。この髪は敬子の思いつきで、弓子によく似合う。
「こうして、しょうぶの葉を巻きつけると、日本の昔語りの、姫君のようになるわ」と、敬子は見とれて、
「リボンで結んでいると、異国的だけれど……」
先きにあがつて、肌の露をふき取つている、弓子の裸身が、女の敬子にもまぶしいようだ。数えでなら、十九の厄年だから、もう完全な女である。
性の転換の手術の記事が、新聞や雑誌に、つづけさまに出るのを、弓子も読んでいて、ある日、なにげないように、
「弓子は完全に女らしいわ、残念ながら……」と笑つた時には、敬子も笑つて、
「それは困つたわね」と、まぎらわせた。
弓子の父に似ているのは口もとだけで、張りのある目も、長いえりあしも、それから耳の形も、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.